

附属学校と県立高校による連携型中高一貫教育の取り組み

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校
校長 加藤 圭司
副校長 加藤 俊志

1 はじめに

平成 11 年度に中高一貫教育が制度化されたことで、全国で中高一貫教育校が設置されるようになり、平成 25 年 4 月現在、全国で 450 校が設置されるに至っている。

国立大学の附属学校においても、附属中学と高校を併設している国立大学は全国で 10 校、中等教育学校を設置している国立大学は 4 校あり、それぞれの学校で中高連携による教育活動を展開している。しかし、国立大学の附属中学校と県立の高等学校とで連携型中高一貫の取り組みを行っている事例は、現在、本校と神奈川県立光陵高等学校の一例のみである。

本校の実践研究の紹介にあたり、本稿では、設置者が異なる連携型中高一貫校の取り組みを紹介する。

2 連携の経緯

平成 15 年頃から横浜国立大学と神奈川県教育委員会の間で情報交換が行われ、平成 19 年 6 月には、横浜国立大学教育人間科学部と神奈川県教育委員会の間で「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデルの構築」の基本構想案が合意された。そして、同年 12 月には実施計画が策定されるに至っている。中高 6 年間を通して生徒一人ひとりが個性と特性を伸ばさせる教育の展開に資するために、中・高・大の連携により「かながわの中等教育の先導的モデルづくり」となる教育展開の実践研究を進めることとなったのである。

平成 26 年度で足かけ 7 年目を迎えるが、この間、平成 21 年には「中・高・大連携によるこれからの中等教育の先導となる教育実践モデルの構築に係る実践研究会」を設置し、本校及び光陵高校との連携型中高一貫校教育に関する実践研究に取り組んできている。取り上げられた研究テーマは、「中高一貫教育における『リテラシー』育成カリキュラムの作成」、「教育委員会と大学の連携及び中高生の相互交流の推進」、「入学者選抜の調整」などである。

これらの研究の成果や中・高・大実施計画の内容を踏まえて、本校と光陵高校は平成 21 年 4 月から「リテラシー」の育成の取り組み、教員合同研修会、研究発表会、「総合的な学習の時間」における連携、そして今年度で 4 年

目となる「連携枠」における入学者選抜などを行ってきている。

3 連携の概要

(1) ねらいと方法

ねらいは 2 点あり、「かながわの中等教育の先導的モデル」となる教育実践の推進と、「リテラシー」を身に付けた次世代を担う人材の育成である。

本校及び光陵高校は、この「リテラシー」を本来の読書能力やある分野における知識を表す言葉としてとらえるのではなく、「これからの社会をよりよく生きるための幅広い能力」として位置づけている。「リテラシー」の育成に当たり、「熟考する力」を基盤として「学び続ける力」、「感じとる力」及び「行動する力」を育み、それらを総合して、「問題解決力」を身に付けることができるよう、6 年間を見通した教育課程編成や連携枠入試の実施等の教育活動を展開している(図 1)。

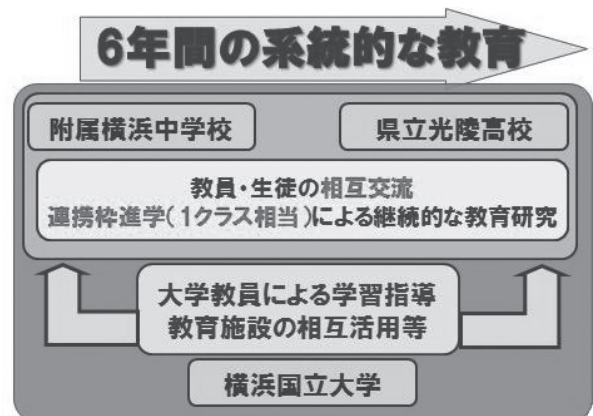


図 1 「かながわの中等教育の先導的モデル」の実施形態 (2) 期待される効果

この取り組みでは、両校の生徒の「確かな学力」の伸長、「リテラシー」の享受とともに、連携を生かした「キャリア教育の展開」、さらに「大学の教育資源の活用」に関するモデルを提示することが求められている。また、県内の中・高等学校の「教育改善」に反映することが期待されている。更に、大学にとっては、中・高・大の連携に関する継続研究の場となることが期待されている。

(3) 合同研修会における教職員の連携

附属横浜小学校、附属横浜中学校、光陵高校と横浜国立大学の4校の教員が合同で研修会をもち、講演会や教科別研究協議により、児童・生徒に育成しようとする力を再確認するとともに、教員の相互理解の促進を図っている。

平成26年度は7月に開催され、リテラシー育成に関する取り組みについて共通理解を図るとともに、文部科学省の専門官による「これからの時代に求められる資質・能力」について講演を行った。また、分科会では、新たに「連携枠進学成果と課題」をテーマに情報交換を行っている。

(4) 「総合的な学習の時間」における連携

～i-ハーベスト発表会～

本校の「総合的な学習の時間」で行われている「TOFY」は、生徒が「自ら見出した課題について、見通しをもって多面的・多角的に考え調べると共に、得られた根拠を基にした判断、提言、思いを工夫して表現し、自己の生き方について考えることをめざして、1年で「TOFY基礎」2年からは「TOFY研究」に取り組んでいる。

一方、光陵高校の「総合的な学習の時間」である「KU」は、「課題を自ら発見し、その解決に向けて主体的に探究・表現する活動を通して、思考力・判断力・表現力等を身に付け、これからの社会に求められる『生きる力』を育む」ことをねらいとしており、「TOFY」をさらに深化させた内容と位置づけることができるであろう。

以上の「TOFY」と「KU」の成果発信は、平成22年度までは各校で行われる発表会や、光陵高校の文化祭における「TOFY・KU合同発表会」で行われてきたが、平成23年度からは「i-ハーベスト発表会」（横浜国立大学主催、神奈川県教育委員会共催：写真1）として毎年9月に開催するかたちが定着している。この「i-ハーベスト発表会」に参加することにより、上級生がどのような研究テーマに取り組み学んでいるかを知り、自分の進路や職業を考える契機となっている。生徒の「リテラシー」の育成において、この発表会の位置づけは非常に大きいものがある。



写真1 i-ハーベスト発表会の様子

(5) キャリア教育による連携

本校の「総合的な学習の時間」は「TOFY」に加えて「CAN」も柱の一つである。その中で、光陵高校との授業交流等の進路体験学習を行っている。また、光陵高校も横浜国立大学との間で職業観の育成を図ることを目的とした、高大連携の活動に取り組んできている。

(6) トライアングレーション評価

附属横浜小学校、附属横浜中学校、光陵高校の3校による異校種間学校評価である。連携する異校種学校の教員に学校を1日見てもらい、気づいた点をワークショップ方式でまとめてフィードバックを行っている。

(7) 連携枠の入学者選抜

光陵高校は、附属横浜中学校においてリテラシー育成を重視した学習に積極的に取り組み、一定の成果を上げ、かつ光陵高校を第1希望とする生徒に対して、1クラスを上限とした調査書や学力検査によらない簡便な入試（連携枠の入学者選抜）を行っている。現在1学年に32名、2学年に30名、3学年に28名在籍しており、この取り組みも徐々に定着しつつある実態である。

(8) 生徒間の交流

部活動を中心とした交流を行っている。具体的には、合同での練習や光陵高校の文化祭や音楽祭への参加等である。

4 おわりに

本年度実施した合同研修会の分科会における「連携枠進学成果と課題」の中で、連携枠生徒の「総合的な学習の時間『KU』における牽引力」、「プレゼンテーション力」の高さが確認された。これは、取り組みの成果の一つであると言えよう。また、合同研修会や研究会の研究協議において、「リテラシー」育成に向けて、どのように授業を展開していくかについて中・高の職員で協議をしている。これは、6年間を見通した組織的な授業改善に繋がると考える。

併せて、神奈川県内の公立中高一貫校の開校（開校予定）が進む中で、「先導的なモデル」として本連携が果たした役割も大きいと考える。

今後の課題としてあげておくべきことは、連携枠入学生の大学進学状況であろうか。附属横浜中学校で学んだ力を光陵高校でどう伸ばせたのかも含め、具体的に検証していきたい。また、教育が多様化する中、国立大学と教育委員会はより密接に連携を取っていかねばならないが、本連携をさらに進化させた「先導的なモデル」として、これまでの取り組みを検証しつつ、長期的な展望を持って、円滑に推進していくことが重要であると考えている。